

一般大学における国語科・専門教養の基礎力養成： 教科教育法での「小テスト」の分析を通して

著者名(日)	木村 雅則
雑誌名	樟蔭教職研究
号	1
ページ	26-36
発行年	2016-12-22
URL	http://id.nii.ac.jp/1072/00004054/



一般大学における国語科・専門教養の基礎力養成

—教科教育法での「小テスト」の分析を通して—

How to Develop the Basic Skills of the Professional Cultivation for Teachers of Japanese Language in Non-Educational University —By Analyzing "SMALL-TEST" in Pedagogy of Japanese Language—

学芸学部 国文学科 非常勤講師
木村 雅則 Masanori KIMURA

要旨：本稿では、まず本学「国語科教科教育法A」で毎時間実施している「小テスト」の実施結果について、過去6年のデータを分析する。また開講時に実施している「基礎力テスト」とも照らし合わせ、それらの変化の特徴や原因について考察する。次に、学生が採用試験を受験しようとする時の、専門教養(国語科)の基礎力養成とその定着について考える。これは本学のみならず広く一般大学(非教育系大学)全体の学生について当てはまるであろう問題である。なぜなら、ほとんどの一般大学の学生は大学入試でも「古典」が不要であったり、高校でも古典の基礎力については十分な学習ができていなかったりする傾向にあるからである。そのような学生が採用試験を受けようとする時に、専門教養の基礎力を作られることでどのように構築すべきかを考えることは、喫緊の課題でもある。本稿では、授業の経験にも基づいて、その解消のためのいくつかの方策についても提案したい。

Abstract: In this paper, the results of six years of "Small-Test" are analyzed. In this test, the Japanese classical grammar and the phrasing of Chinese classic are chiefly tested. This test has been carried out every time in the "Kokugoka Kyoka Kyoikuhou (Pedagogy of Japanese Language) A", which is one of the classes to get Japanese language teacher's license. Also these results are discussed in comparison with the results of the "Basic Skills Test", which has been carried out in the first lesson in this class every year. Through these analysis, some problems for the training and developing basic skills of professional cultivation for teachers of Japanese language in the non-educational universities will be clarified. Almost all the non-educational university students have not experienced the entrance examination of "Classics" nor studied enough the Japanese classical grammar and the phrasing of Chinese classic, so they must struggle for the study of the teacher employment examination. In order to solve these problems, it should be divided into three stages of learning to master the basic academic abilities. And some concrete strategies will be also proposed in this paper.

キーワード：小テスト、古典文法、漢文句法、基礎力、段階的学習

Descriptors: SMALL-TEST, Japanese classical grammar, phrasing of Chinese classic, basic skill, stage of learning

はじめに

本学(大阪樟蔭女子大学を指す。以下同じ)2年次生配当の「国語科教科教育法A・B」では、毎時間の冒頭に7分間の「小テスト」を実施している。この小テストの目的は2つあり、1つは教科書教材レベルの古文や漢文を正確に読めるようになることの基礎力養成のため、もう1つは教員採用試験における専門教養の対策のためである。

本稿では、まず過去6年間の「小テスト」と「基礎力テスト」との結果を分析し、本学学生の持つ実力や

学習方法などについて、その実態や問題点を明らかにする。次に、この分析を基にして、本学のみならず広く一般大学(非教員養成系大学)における国語科の専門教養の基礎力の養成とその定着に関して、直面しているであろう課題を明らかにする。そして最後に、明らかにされたそれらの課題を解消するための方策について、できるだけ具体的でかつ即効性のあるものを中心に、提案という形で明らかにしたい。

1. 「文法小テスト」と「基礎力テスト」について

1-1 小テストの内容

稿者が本学で「国語科教科教育法(A・B)」を担当したのは、平成23年度からである。本学では、「国語科教科教育法」はA～Dの4コマが設定されており、Aで教科の総論を、Bで古典(古文・漢文)を、C・Dで現代文をそれぞれ担当することになっている。このうち、A・BとC・Dとで担当者が異なり、2名体制で指導している。

稿者が担当した最初の年度から、あらかじめ範囲を予告した上でA・Bの授業冒頭に「小テスト」を実施してきた。今回分析の対象とするのはAで実施した小テストの結果である¹⁾。

小テストは20点満点であり、12点が文語文法に関する項目、8点が漢文句法に関する項目である。文語文法については、最初の2年間は助動詞だけを小テストの対象として10回実施したが、3年目(平成25年度)からは「基礎力テスト」(後述)の実態把握に基づき、学生の勉強のペースメーカーの役割を明確化させるためにも、できるだけ小テストの回数を増やすことを考え、用言を加えて12回の実施とした。そのため、「総合問題」を2回から1回に減らしたが、これは告知・返却の時間確保のためである。

「小テスト」のうち、文語文法の具体的な試験範囲は、以下の表1のようにになっている。

表1 小テストの出題範囲・文語文法

	年度	23	24	25	26	27	28
事項 \ 実施回数	10	10	12	12	12	12	12
動詞	—	—	○	○	○	○	○
形容詞・形容動詞	—	—	○	○	○	○	○
用言総合	—	—	○	○	○	○	○
助動詞①過去・完了	○	○	○	○	○	○	○
助動詞②推量1	○	○	○	○	○	○	○
助動詞③推量2	○	○	○	○	○	○	○
助動詞④推量3	○	○	○	○	○	○	○
助動詞⑤受身・使役	○	○	○	○	○	○	○
助動詞⑥打消・打消推量	○	○	○	○	○	○	○
助動詞⑦断定・伝聞推定	○	○	○	○	○	○	○
助動詞⑧願望・比況	○	○	○	○	○	○	○
用言・助動詞総合	—	—	○	○	○	○	○
助動詞総合1	○	○	—	—	—	—	—
助動詞総合2	○	○	—	—	—	—	—

⑨助動詞①～⑧は、以下の通りの配分とした。

- ①=き・けり・つ・た・たり(完了)・り
- ②=む・むず・らむ・けむ
- ③=べし
- ④=らし・めり・まし
- ⑤=る・らる・す・さす・しむ
- ⑥=ず・じ・まじ
- ⑦=なり(断定・伝聞推定)・たり(断定)
- ⑧=たし・まほし・ごとし

また、漢文句法の具体的な試験範囲は、以下の表2のようにになっている。3年目(平成25年度)から実施回数の合計が2回増えたが、総合問題を増やすのではなく、範囲を分割して対応することとした。

表2 小テストの出題範囲・漢文句法

	年度	23	24	25	26	27	28
事項 \ 実施回数	10	10	12	12	12	12	12
訓読の基本・再読文字	○	○	○	○	○	○	○
否定	○	○	○	○	○	○	○
疑問	○	○	○	○	○	○	○
反語	○	○	○	○	○	○	○
使役	○	○	○	○	○	○	○
受身	○	○	○	○	○	○	○
比較	○	○	○	○	○	○	○
仮定	○	○	○	○	○	○	○
限定	○	○	○	○	○	○	○
感嘆(詠嘆)	○	○	○	○	○	○	○
抑揚・累加	○	○	○	○	○	○	○
句法総合	○	○	○	○	○	○	○

難易度としては、高等学校の教科書教材に頻出するものを中心に、おおむね「国語総合」の範囲(高等学校1年生想定)で出題した。ただしこれは稿者の現場での経験に基づく主観的基準であり、たとえば出題頻度順などのデータに基づくものではない。また「小テスト」の性質上、受験テクニックのような奇を衒ったものは当然出題していない。

また、設問は毎年全く同じというわけではないが、難易度が大きく変動することを避ける意味も含めて、前年度の問題や過年度の問題を繰り返し出題している場合がある。

1-2 「基礎力テスト」

「小テスト」とは別に、「国語科教科教育法」を受講する前の基礎力チェックのために、春期配当の「国語科教科教育法A」の最初の授業時に実施している。古典文法 75 点＋漢文の句法と漢詩の基礎について 25 点の計 100 点満点である。これも「シラバス」で実施日と内容を予告してあるので、こちらとしては当然「学生は勉強して臨んでいる」ものと理解している。出題形式は毎年同一であるが、例文や読解本文は差し替えている。

「小テスト」と違う点は、文法だけでなかったり、句法だけでなかったりする設問を含んでいる点である。具体的には次のような点である。

- ・古典文法…①敬語法を含む。②単文での出題に加えて、文章読解の出題を含む。具体的には現代語訳の設問があったり、主語を問う問題があったりする。ただし配点はさほど高くない。①と②とを合わせても、75 点中 8～10 点程度である。
- ・漢文…漢詩の問題を含む。具体的には漢詩の形式を書かせたり、押韻している文字を抜き出させたり、漢詩の作者名を書かせたりする。配点は、25 点中 8 点である。

古文の文章読解についての本文は、高校の「国語総合」か「古典B」の教科書掲載文である(たとえば『徒然草』「神無月の頃」「仁和寺にある法師」、源氏物語「御法」、枕草子「中納言参り給ひて」など)。また漢詩については、高等学校教材のほか中学校教科書に掲載されている教材を使うこともある(たとえば杜甫「春望」や李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」などは中学校教材、李白「静夜思」や王維「送元二使安西」などは高等学校教材)。

1-3 結果

これらの過去 6 年間の結果を、表と標準化したデータを用いてのグラフで、経年的に示す。

「小テスト」のうち、過去 6 年全てに共通する 8 回(表 1・2 の太枠部)と、総合問題として扱ったもの(表 1・2 の二重枠部)を共通している部分と見なし、全部で 9 回分のデータを分析の対象とする。また、それら全体の平均も分析対象と捉える。以上の対象を示したものが表 3 であり、その数値をグラフ化したものが図 1 (次ページ)である²。

また、「小テスト」の平均点と「基礎力テスト」の得点とを併記したものが表 4 であり、それを基にデータを標準化して両者の相関関係を示したものが、図 2

(次ページ)である。

表 3 23～28 年度の「小テスト」得点(20 点満点)年度

回	23	24	25	26	27	28	平均
1	7.6	7.9	7.7	5.9	7.7	7.8	7.4
2	6.7	5.1	5.5	4.1	5.0	6.8	5.5
3	7.0	5.5	8.6	7.0	8.2	10.1	7.7
4	5.5	5.5	7.9	6.6	6.6	9.5	6.9
5	8.2	7.1	10.3	7.4	9.2	12.9	9.2
6	9.5	11.0	12.4	9.8	12.9	12.2	11.3
7	6.9	5.9	5.6	4.6	6.2	6.4	5.9
8	6.7	5.4	4.3	3.5	3.6	4.8	4.7
総	1.1	1.4	1.4	1.6	1.1	2.3	1.5
平	6.6	6.1	7.1	5.6	6.7	8.1	6.7

⑨「総」は範囲が総合、「平」は平均。

表 4 「小テスト」と「基礎力テスト」

年度	基礎	小テ(100換算)
満点	100	20 (100.0)
23	21.0	6.6 (33.0)
24	22.0	6.1 (30.5)
25	22.6	7.1 (35.5)
26	17.6	5.6 (28.0)
27	21.0	6.7 (33.5)
28	26.3	8.1 (40.5)
平均	21.8	6.7 (33.5)

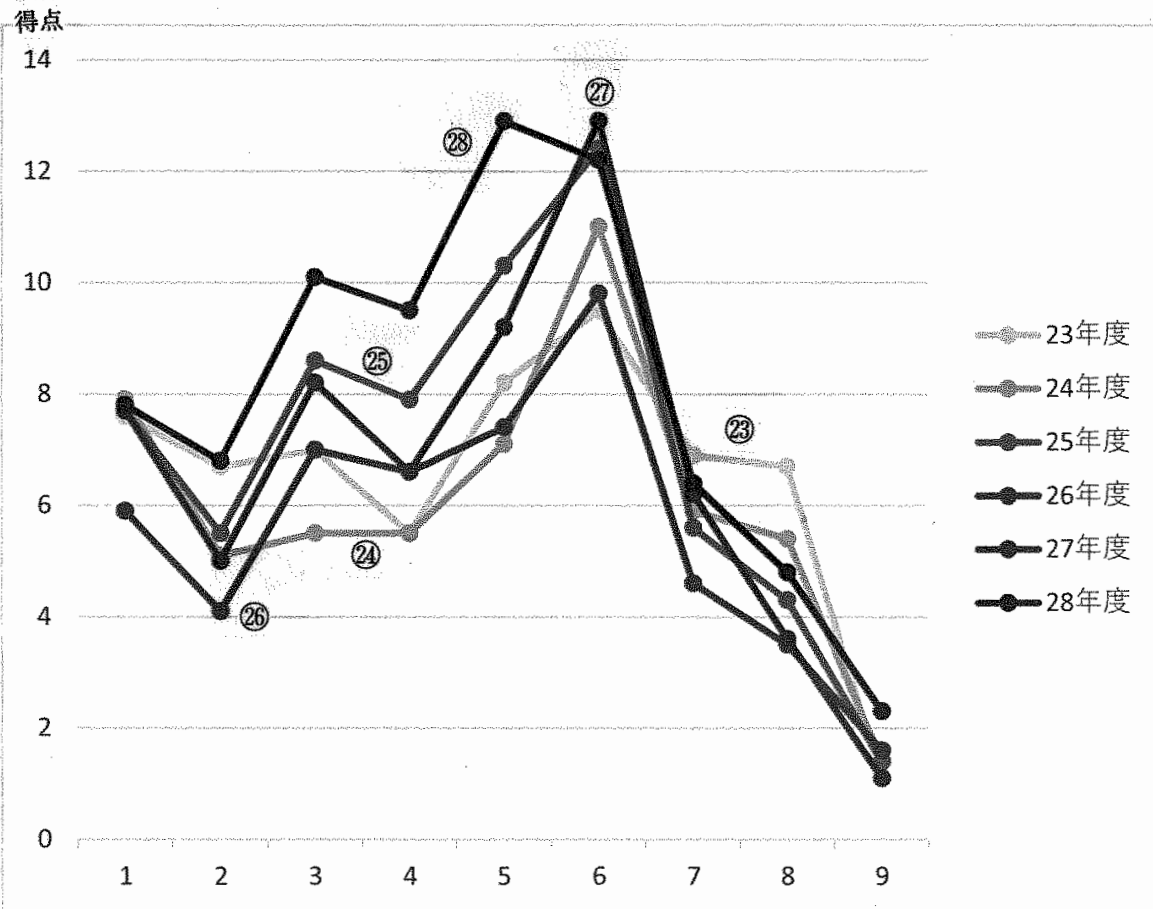


表3 「小テスト」得点変化 (20点満点) (丸数字は年度)

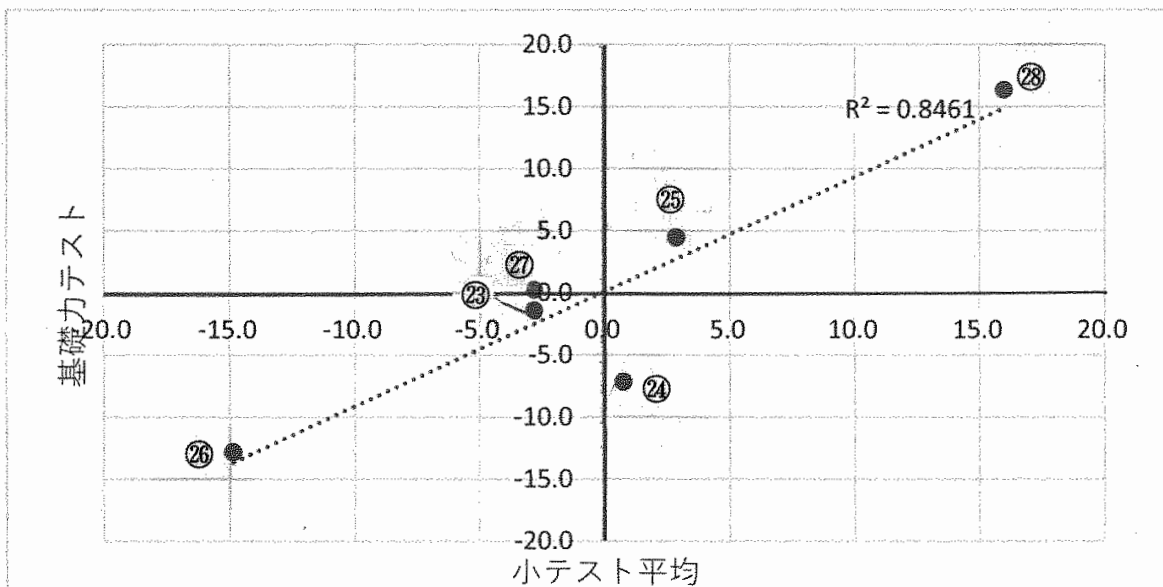


表4 「小テスト」と「基礎力テスト」の相関

1-4 分析

これらの得点状況から、およそ次のような傾向が読み取れる。それぞれを理由や考察とともに、以下に列挙する。

A 「小テスト」に関して

① 過去6年間とも、全ての回での得点傾向はおおむね同じである。つまり、2回目から5回目は漸増して行き、6回目が最も高い得点で、以下急激に得点小さくなる。

→ 2回目以降の得点上がるのは、この形式の「小テスト」に慣れていくことと、学生の勉強のペースができていくことの両方が原因である。また、受講学生が比較的積極的にこの「小テスト」に取り組んでいることも裏付けられる。

- ・ 最高点の6回目は、範囲が狭く出題が限られたものであったか、テストの内容が他の回に比べて易しかったからであると思われる。
- ・ 7回目以降が急激に下がるのは、いくつか理由が考えられる。たとえば①古典文法も漢文句法も比較的マイナーなもの、つまり教科書教材でもそうそう頻繁には使われない助動詞や句法の項目であった。②学生の「小テスト」へ取り組む意欲が小さくなった。つまり「小テスト」のための予習をしないようになった。③授業の日付から考えるに、本授業以外の授業で発表やレポートなどの時期が重なるなどで、②ではない理由により学生の自修時間を大きく取る状況であった、などの理由が考えられる。ただし③については手元にデータがないので、あくまでも可能性の指摘にとどめる。

② 全ての年度において、最後の「総合」の得点(図2では「9」にあたる)が非常に小さい。

- ・ これは、あらかじめ範囲がわかっている回の「小テスト」には適応してきても、何が出されるかわからないとなると得点できないということを示している。
- ・ このような状況は、現在まだ学習が終わって定着までしていない状況(よく言われる「今勉強している最中」の状況)であることを意味している。
- ・ また同時に、授業ごとに課される「小テスト」に対応するための予習はできているが、実施後の復習や補強ができていないために、後日時間

において以前の範囲を振り返ったときに想起できないことも、原因の一つである。この「小テスト」式の方法では、予習や計画的進行ができる長所があるが、復習が不足しやすいという短所もあることは、頭に置くべきである。

- ・ ただ、「適切に範囲を設定すれば事前に努力することができる」つまり「予習ができていないか習慣づけられている」と見る見方も正しい。古典文法や漢文句法は、通り一遍の学習で定着するものではなく徹底した反復学習が必要であるので、その意味では「今後の反復学習ができる、学習習慣の定着」という点での成果を優先して評価するのがよいかもかもしれない。

③ 年度別に見ると、高得点の年度はどの回も常に高得点であり、低得点の年度はどの回も全体として低い得点が続いている。つまり図1を見ると、各年度の折れ線の交差が少なく、年度ごとに比較的分離した傾向を示している。

→ 具体的には最初が最も得点の低い26年度は、9回中4回が最も得点が低く、平均点でも他の年度と比較すると最も低い。

- ・ 逆に、28年度は第1回から第5回まで最も高い得点を続けているし、平均点も最も高い。
- ・ ただし、最後の「総合」の回には、この傾向はあてはまらない。つまり、①で見たように、過去6年間で最も平均得点が高い28年度でさえ、他の対象年度とさほど大きく離れて得点しているわけではない。

B 「小テスト」と「基礎力テスト」の比較に関して

① 「小テスト」と「基礎力テスト」とは強い正の相関関係があると見てよい。すなわち「基礎力テスト」の得点が高い年度は「小テスト」も得点が高く、「基礎力テスト」の得点が低いと「小テスト」でも得点は低い。

→ これは、大学2年次生の段階になる以前に、ある程度の文法力や句法力を身につけておかないと、2年次以降に身につけようとしてもなかなか容易には行かないことを暗示している。

- ・ ただし、決して記憶力の伸びがないことを意味しているのではなく、文法や句法に関する勉強の仕方がわからないとか、文章表現の上でどのような特徴に注目すべきなのかわからない(と言うより、慣れていない)などの状態だと思われる。

② 「基礎力テスト」は、受講開始時の実力を知ることができるばかりではなく、その後の「小テスト」での結果の推測ができるために、指導の指針としての効果を持っている。

→ 相関関係が強いということは、そのデータから将来の得点変化を容易に予測できることを意味している。授業が進行していき実際に「小テスト」を始めてからその年度の学生の力が徐々に明らかになる前に、ある程度の予想がつくのでいわゆる「先手に回る指導」が可能となる。

- ・「基礎力テスト」の結果が先入観になってしまっただけとはいえないことは、言を俟たない。しかし、担当者からすれば、集団のほしいの力を予想できるとともに、つまずきやすそうなところをあらかじめ先手を打って対応したり、学生のレベルに合った指導をするという点でのメリットは非常に大きい。
- ・その意味でも、「基礎力テスト」は「小テスト」とは別に、今後も続けてやるべき意義はあると考える。

なお、本稿の主眼は「小テスト」に関する分析であるので、「基礎力テスト」に関する分析はこれ以上は取り上げないこととする。

1-5 まとめ

以上の分析をまとめると、「小テスト」および「基礎力テスト」の状況と結果から、本学学生の特徴として次のような点が挙げられよう。

- 1 初回の得点が高い方が、その後の伸びも期待できるし、全体の平均も高くなる。
- 2 あらかじめ範囲がわかっている時の対応はできるが、何が出されるかわからないとなると得点できない。つまり学習習慣がなくはないが、実力が不十分のため応用力に乏しい。

単純にこれらから考えられる指導は、「この小テストを始める前に、古典文法と漢文句法について学習をさせておくこと」と「学習を計画的に正しく積み重ねていかせること」である。

前者はおそらく大学入学前の学習の影響もあるであろう。特に本学のように、入試で古典を課さない大学では、どこでも同じような問題にぶつかっているはず

である。問題は、それを学生個人の責と考え、自主的自発的に必要なものを埋め合わせておくことを義務づけるにとどまることではなかろうか。もちろん、それができるに越したことはないが、古典の試験なしに入学させた以上、必要であるなら入学後大学が何か手立てを施すのが自然であり当然であると言える。

後者については、当授業で実施している「小テスト」のように全体の計画を示し、それを着実に実行することで、学生の学習のペースメーカーとしての役割を果たすことができると考える。授業の内容とは別にもう一本の柱を授業で立てるだけのことである。もちろん、作成・実施・採点などの手間はあろうし、本学の場合、現在は幸か不幸か受講者数がそれほど多くないからこそできることかもしれない。内容の性質上、一度通して終わりではなく、何度も何度も反復していくものであるだけに、単に「現在の力や自学自修力を試すテスト」であるだけでなく、「テストを通じて学べるテスト」つまり「問題演習を通じて自分の基礎力を補充したり新たな知識を身につけることもできるテスト」を作成することが必要である。よく言われることであるが、「『頭に入れる勉強』と『頭から出す勉強』の両方の実行」である。

また、こういう指導法が「教科教育法」の授業で教えておくべき内容の一つとなっている点も、受講学生に理解させておくことが大切である。話が少し大きくなる嫌いがあるのでこれ以上は言及しないが、「教科教育法」は単に学習指導案の書き方や実地授業のテクニックの伝達だけで終わるのではない。「いかに学習者（生徒）の実力を養成させていくか」という方法の実践例の一つとして、こういう指導法を教員志望の学生に体験させておきたい。そして、それによって着実に実力を身につけることができた学生は、将来教育現場に出た時に、必ずそれを生かすことができるであろう。それこそまさに真の意味での「教科教育法」であるのではなかろうか、と考える。

3. 基礎力の段階的学習に関して

3-1 専門教養の基礎力とは

教員採用試験の国語科専門教養の基礎力にあたるものとしては、いろいろな観点から考えられるだろうし、中学校と高等学校の校種による違いもまた存在するに違いない。ただ公立学校の教員採用試験の場合、実際の問題を見てみると、中学校と高等学校との出題内容

が同じであるということも少なくないので、「中等教育」という括りの中での「専門教養」と位置づけた出題がされていると考えてよいと思われる。そうなると、中学校では古典文法や漢文句法を直接に授業で扱うことはしないとしても、「中等教育としての専門教養」を考える時には、それらも含めて考えられなければならないことになる。

この時、少なくとも古文における文語文法と、漢文における基本句法(句形・構文とも言われることがある)とが、少なくとも「専門教養の基礎力」に含まれるとしても、異存はないであろう。

では「基礎力」を定着させるためにはどのように学習を進めさせればよいか。そのためには、基礎力を身につける時期に注目した「学習段階」を意識することが大切であると考えられる。つまりそれぞれの時期に見合った「段階的学習」はもちろんだが、それらの学習段階でつまずいたり、経験すべき学習段階が欠落していたりするかもしれない、ということも当然意識して、目の前の学生に対応していかなければならない。

本来ならば、「国語科としての専門教養における基礎力とは何か」という問題についてまずよく考える必要があることは理解しているが、本稿の趣旨に鑑み、今、古典文法と漢文句法をその「国語科としての専門教養における基礎力」を表す代表的指標のような位置づけで、以下の分析と提言をすることにする。具体的には、まず古典文法の学習段階について述べ、そのあと古典文法の場合と対比させながら漢文基本句法の学習段階について述べる。

3-2 古典文法の段階的学習

教員採用試験までの古典文法の学習には、大きく3つの段階が考えられる。

第1段階は、高校に入学して始めて古典文法を学習するプロセスである。標準的な流れでは、1年の前期で文節・文構成・用言を、1年の後期で助動詞を、2年で動詞を中心とした敬語を学習する。これを「第一次学習」と呼ぶことにしよう。

第一次学習の問題点は、学習内容の不統一、つまり古典文法をどの程度まで高校時代に学習しているか、ということが全く等しさを持っていないということである。本学においても、用言や助動詞・敬語法などを徹底的に暗記・運用演習させている高等学校の出身者もいれば、「入試に古典が必要でないなら、用言の活用や助動詞は全てを暗記する必要はないし、文法書を

調べてわかればじゅうぶんだ」とする高等学校を卒業している学生もいるし、極端な場合には古典文法の学習どころか副読本としての古典文法のテキストを購入すらしていない高等学校の卒業生もいる。ありてい言えば、現在の高等学校の古典文法の学習レベルは、良く言えば生徒の実態に合わせて多様化していると言えるし、悪く言えば全く野放図であり最低ラインの文法力すらも担保されていないということになる。この件については後述する。

第2段階は、大学入試の古典の試験に備える受験勉強の時期である。この段階を「第二次学習」と呼ぼう。第一次学習に比べると、第二次学習ではかなり細かいことや難解な内容の理解と運用まで求められる。また大学入試合格という具体的な到達目標も設定されているので、自己の到達度を知りつつ、相当な時間をかけて取り組まれるのが通例である。また、単に文法事項の暗記にとどまらず、その文法事項を前提とした本文解釈や心情読解などの応用的運用まで要求される。例えば50万人ほどが受ける「大学入試センター試験」国語第3問の古文では、文法用語や項目を直接問う設問はもちろん、質量ともかなりハードルの高い文章と設問が用意されていることからわかる。もちろん、第二次学習ではいわゆる「受験テクニック」的な条件反射的要素も要求されるものの、もともと古典文法は「正しく解釈するための道具」としての役割的要素が強いので、それをあながち否定はしづらい。

そして第3段階は、教員採用試験対策用の勉強の時期である。これを「第三次学習」と呼ぶことにする。ここで最も注意すべきことは、第三次学習は単に教員採用試験に合格するための受験勉強ではないということである。第二次学習は、早い話が大学入試用の受験勉強であるから、簡単に言ってしまうと「大学入試にあまり出ない項目は後回しにする」とか「とにかく入試の日まで覚えておれば後は忘れてもよい」という作戦も取れなくはない。だが第三次学習の場合は、確かに「採用試験の受験勉強」的な色合いがあることは事実であるものの、「教員採用試験にあまり出ない項目は後回しにする」と割り切ることは出来ない。なぜなら、この古典文法の学力は、採用試験に合格するためにだけ必要なものではないからである。つまり、採用試験に合格して教壇に立つと、古典文法の全てが指導の対象範囲になる。特に高校教員の場合はそれが明確であり、仕事に就いた初日からフルに活用し、生徒に理解させるべき内容であるということである。ここが第二次学習と第三次学習の決定的な相違である。また

同時に、現実には古典文法に苦手意識を持つ学生ほどこの視点を忘れやすいので、注意を要することでもある。第三次学習が単に「教員採用試験に合格するための勉強」ではないことは、長い目で見るとプラスに作用するはずである(後述)が、ここではマイナスに働く危険があるということも意味している。

とはいえ、確かに「採用試験の受験勉強」的な色合いがあることは事実であるので、たとえば国公立大学のように二次試験でもかなり強烈な古典が出題される環境で入学する学生であれば、対策は比較的たやすい。もともと第二次学習が相当深まっていることに加え、二次試験が高校3年生の2月や3月にあることとも合わせ、この第三次学習は「第二次学習の復習または覚え直し」という程度で対応できるからである。採用試験の古典(古文・漢文)は、自治体ごとに長短や難易の差はあれ、たいていは大学入試問題レベルで対応できる。つまり第二次学習がきちんとできていれば、そう困るものは少ない。だからこそ、採用試験用の対策として大学入試用の参考書・問題集が有効であるということにもなるのである。

3-3 現状での問題点

問題なのは、本学はじめ多くの私立大学が該当することであろうが、第二次学習ができていない学生、つまり大学入試で古典が課されないため、高校時代に古文や漢文の受験勉強をしていなかった学生である。これらにとっては、第二次学習を経ていないので、この第三次学習であるべきところが第二次学習になっていることである。

この時、成否を分けるのは第一次学習での学びの深さ、つまり「高校でどこまで古典文法を勉強したか」という点である。第一次学習で曲がりなりにも古典文法の全項目について一通り学習できている場合は、結局、時期をずらせて第二次学習のようなものに取りかかるわけだから、方法も内容も比較的明らかになりやすい。だが、第一次学習で古典文法を全ては学習しなかった場合、たとえば比較的よく登場する文法項目だけを学習したとか、古典文法については高等学校でほとんど学ぶことがなかったというような場合、学生にとってはこの第三次学習で「始めて出会う文法項目」が登場する。もともと文法的に文章を分析するという視点が少ない学生なので、いよいよ現実に教員採用試験を意識し始めた時にこの「始めて出会う文法項目」に出会うと、非常に怖く感じるらしい。

稿者の経験によると、「比較的良く登場する文法項目」は、たとえば次のものがある。

・頻度の高い助動詞

例 過去「き」「けり」
完了「つ」「ぬ」「たり」「り」
推量「む」「べし」
打消「ず」
断定「なり」

・一部の助詞

例 格助詞「の」、接続助詞「ば」「ど」

・係り結びの法則と係助詞

・頻度の高い敬語動詞

例 補助動詞「給ふ」「奉る」
本動詞「のたまふ」「申す」

逆に、「始めて出会う文法項目」は、たとえば次のようなものがある。

・助動詞なら使用頻度が少ないか使用範囲の限られているもの

例 比況「ごとし」推定「らし」
複数の意味の識別「む」「べし」「る・らる」

・特定の頻出する助詞以外の、全ての助詞。第一次学習ではまず系統的・体系的に取り上げることができていないし、第二次学習が比較的しっかりしている場合でも、助詞に自信を持っているという学生はきわめてまれである。要するに、学習上の死角になっているのである。

・「口語文法と同じ」という言い訳で取り上げないもの。中学校での口語文法の学習にもよるが、それも期待できない場合はもはやお手上げとなる。

例 単語の分類や活用、文の種類・文節相互の関係などの構文、自立語なら名詞・連体詞・感動詞。

加えて、大学入学後にいわゆる「学校文法」に接する機会がほとんどないことも、古典文法学習上の大きな妨げとなっている。国語学や日本語学で文法を取り上げても、学校文法(または橋本文法)とは限らないし、日本語文法のように「マス形」「ナ形容詞」という術語や視点は、高等学校の古典文法の学習に直接役立つことばかりではないどころか、未熟な力しかない場合はかえって阻害要因となる危険すらある。

稿者の本務校では「国語文法論Ⅰ・Ⅱ」という授業

を開講しているが、これは稿者の所属が教員養成系の教育学部であるからである。「国語文法論Ⅰ」では口語文法について、「国語文法論Ⅱ」では文語文法について、それぞれの内容の学習とともに、たとえば

- ・指導時の配慮事項（副読本と市販参考書との不一致を生徒が質問すればどう答えるべきかなど）
- ・生徒のつまずきがちな部分とその理由（助動詞「なり」が終止・連体同形の動詞に接続している時の見分け方 など）
- ・文法を生かした授業展開や読解とその指導案について（「文法の授業はつまらない／味気ない」などという思い込みを生徒が持たないように、授業で文法力をどう解釈力に結びつけるか など）

など、単なる受験勉強的な意味合いを越えて、現場の授業で教師が陥りやすい点を事前に説明している。しかし、再言するが、これは教員養成系の教育学部だからできる授業であると、稿者は考えている。一般大学や一般学部での「教科教育法」でここまでのことは、時間的にもできない。

これらから、教員養成系の教育学部を除く一般大学や一般学部では、古典文法について、第一次学習の多寡と第二次学習の欠如により第三次学習がスムーズに行きづらい、ということになる。

3-3 漢文句法の段階的学習

漢文句法についても、段階的学習ということでは、前項の古典文法のそれと大差は無い。ただ決定的に異なることは、第一次学習の程度や深さが古典文法の場合以上に高等学校で大きく違うことである。稿者の現場体験でもそうであったが、古典文法の場合以上に高等学校の格差が大きいばかりか、漢文句法を積極的に学ぶことがない高等学校が非常に多い、というのが現実である。

だから極端に言うと、高校入学以降全く漢文の授業を経験していないという学生も予想以上に存在している。これは、高等学校がかなり多様化しており、学習指導要領も現実にはかなり弾力的に運用されているからである。いわゆる「文系進学コース」を名乗っていても「漢文はほとんど授業をしていない」という高等学校は、現実にはかなりたくさんある。加えて、大学入試でも漢文が課されることは、古文よりはるかに少ない（というか、ほとんどないと言って良いくらいである）。「漢文の授業をしない」原因の一つがこの「入試に漢文は出されない」ことが大きく作用しているこ

とは明らかである。だから大学入学後も、漢文に接する授業を受講しなければ、自発的に漢文を目にすることは少ないであろう。

ということは、第一次学習・第二次学習を全く経ずして、いきなり第三次学習に向かうことになる場合がある、ということになる。こうなると、もはや漢文句法について「段階的学習」を順に踏まえて勉強を進めていくというようなことは、現実には不可能になる。つまり大学に入って初めて第一次学習に取り組むのであるから、教員採用試験のための第三次学習を第一次学習とみなすしか方法はない。

その意味では、段階的学習を効果的に進めるためには、古典文法を中心に考えを進める方がまだましであるという言い方になってしまう。ただ前述したように、古典文法もまた第一次学習が欠如している実体があるので、古文漢文の差はさほど大きくないのかもしれない。

4. 具体的戦略の提言

では第二次学習を経ずして入学した学生が、とりあえずは採用試験に備えて古典文法の基礎力を身につけようとする場合、第三次学習では具体的にたとえばどのような方策があるのか、いくつかを列挙する。

なお、前項で指摘したように、以下の各方策の「古典文法」を「漢文句法」に置き換えてもあながち大きな間違いはないはずである。

ア 大学の授業の特性を考える。

授業のようにいわば「(たとえ強制的にでも)古典文法と出会う時間」がないまま、学生の自発的な学習ばかりに期待することは、きわめて甘い考えである。逆に言うと、やはり授業のような「(たとえ強制的にでも)古典文法と出会う時間」を設定する必要があるということになる。

高校の場合、たとえば必修の「国語総合」は標準単位数が4単位だから、週に4時間（4コマ）の授業がある。2時間連続の場合もあろうが、多くは4日にわたって「国語総合」の授業があるはずである。ところが、大学の授業は、通例週1コマである。たとえば「古典文法概論」や「国語文法論」の授業を開講しても、週に1日90分のコマがあるだけで、他の6日は古典文法に出会わない。その6日間は「学生が自学自修することになっているが、悪く言うと学生まかせになって

いる。

文法のように積み重ねが必要な基礎的内容(漢文の句法もほぼ同様に考えてよい)は、毎日取り組むことが基本である。その点では、大学よりも高校の授業形態の方が定着しやすい。

他の授業などのこともあり正直無理は言えないものの、大学入試という明確な目標に向かう第二次学習に比べて、教員採用試験という目標がその学生にとって相当大きなモチベーションにならない限り、勉強を維持することは困難だと思われる。

したがって、「授業以外の時間でいかに古典文法の勉強をさせるか」という視点が、指導者には必要になる。たとえば、ドリル形式の問題集やワークブックを使うにしても、一冊与えて「これをやりなさい」と指示するだけではだめで、実行のためのスケジュールを同時に提示するとか、人数にもよるが毎日提出させてチェックするとか、何か他律的な要素がないと、なかなか実行できないと思われる。

イ 到達点を明らかにする

まじめに取り組む学生ほど「文法はどこまで覚えたらよいかかわからないので怖い」と感じるようである。特に第二次学習を経ずにいきなり採用試験の過去問を見ると、何をどこまでわかっていなければならないのかわからないようだ。

その意味で、指導者は「これについてはここまで理解が必要である」という点を明確に示すことが大切になる。

国語科の教員になる以上は、採用試験によく出題されるものだけを覚えるという姿勢はいただけない。しかし、急いで覚えなければならないこととそうでないことは区別しなければ、勉強の方針も立たない。たとえば、3-3で述べたように、「比較的良好に登場する文法項目」などは、まず頭に入れておかないとどんな古文を読むのにも支障があるはずである。古典文法のことを知らない学生は、全ての項目を均等な力で取り組もうとする。もちろんそれが悪いわけではないが、第三次学習としては時間との闘いもあることを忘れてはいけない。そのためには「ここまで到達する必要がある」「ここまでわかればそれでよい」という指南が必要である。指導者は先達としてそれを示す義務がある。

なお、稿者が担当する「国語科教科教育法A」の小テストは、上記ア・イの目的の下でやっていることを付言しておく

ウ 早くから始める

本来は二次的学習をすべきところを、それを経ずに大学に入ってきた以上、二次的学習にあたる学習を早くから始めることが大切である。そのためには、第一次学習が広くなされていることが前提となる。ただ現実問題としては、入試で古典を課さない大学の場合は、学生の第一次学習が不十分であることが多いので、入学後なるべく早い時期に第一次学習の補充しておくプロセスが必要であろう。これは1で、「基礎力テストが使用テストと強い相関がある」こととも対応している。

本学が、1年次で「古典文法概論」の授業を配当しているのは、その点で正しい。教員志望者ばかりではなく、国文学科で第一次学習の不十分な学生は、将来的に古典文学を学習する上でデメリットも多いはずである。要求されるレベルは違うだろうが、国文学科全体の学力の底上げを図るためにも、早い時期から古典文法の勉強をすることは、いわゆる「リメディアル教育」の一つの柱であると考えられる。

エ 「やればできる」の成功体験を持たせる

稿者はかつて、いわゆる「初年次教育」の一環として、社会福祉学部における「漢字テスト」の実施・分析についてまとめたことがある³。その中で、基礎学力定着のための方策の一つとして、次のように述べている。

『わかった』『できた』という実感(小さな成功体験)を各自に持たせることによって、次なるステップに自発的に取り組ませる方法が最も大切である。(拙稿 49 ページ)

このことは、この「小テスト」の古典文法でも同じであると考えられる。文法力に基づいて本文に対峙し、解釈していくプロセスを生徒に示すことが授業であり、その方法を体得させ生徒に実践させる力をつけることが教師の仕事だからである。

いわゆる学校文法は、古典の原文と格闘する時の道具である。それだけに切れ味の鋭い時には爽快感すら覚える。それが「わかった」「できた」に該当するのではなかろうか。最終的には自発的に取り組むにせよ、

最初はその初速をつけさせなければならない。その原動力として必要なことが「小さな成功体験の重なり」であるとする。

稿者は学生に次のように言うことがある。「今、あなたたちが文法と格闘して、苦勞して理解して記憶しているその全てを、将来教壇に立った時に生徒に伝えることができる。『自分はここをこうして勉強した』ということ、生きた体験として生徒に伝えることができる。だから一生懸命やりなさい」——自分が苦勞した分だけ、将来生徒に伝えられることが多くなる。そういう点もまた、教員養成としての一つの方法ではなかろうかと考えている。

おわりに

教育学部でない学部の学生が教員免許を取得できるのはなぜか。それはその教科の専門力が担保されているからである。だからこそ、教科担当制である中学と高等学校の免許が取得できることになる。逆に言えば、専門力が不足すればその担保が外れ、免許が取得できないことは当然である。

現行の『高等学校学習指導要領』第2章第1節「国語」には、「第2款第1国語総合」の項に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が初めて立項された話題になった。「国語総合」は必修科目である。だが、現実としてはどうか。この項目の(1)アに「(イ)文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること。」と明記されており、教科書ではその項目に従った編集がなされてはいるものの、実際の現場での運用は、ありていと言えば古文(漢文)の大学入試用対策の必要があるかどうか岐路となり、上述した体たらくである。大学で「教科教育法」を担当する教員は、どこまでこのような学校現場での実態を意識して指導できているのであろうか。

本稿では、基礎力の段階的学習を意識することを通して、古典文法の第二次学習を欠如している学生に対して、具体的にどうすることが第三次学習になるのかを検討した。基礎力テストと合わせ、今後も教科教育法の授業をチャンスととらえて、学生の基礎力を徹底的に鍛えていきたいと考えている。大方のご批判とご叱正を仰ぐ所以である。

1 「教科教育法B」では学生が教授者として模擬授業を展開するため、「小テスト」もまた担当の学生が作成・実施・採点する。つまりBでの小テストは、それを受ける学生の実力養成もさることながら、教授者役の学生の作成・実施・採点体験が主眼となっている。そのため、範囲ごとに問題の難易度や得点が一定せず、分析の精度に欠けると考えられるので、今回は分析の対象から外した。

2 表2を見ると、漢文の小テストの範囲の大きくズレているように見えるが、これ23・24年度と25年度以降の総実施回数が違うことが起因である。また、毎回漢文の範囲は大きく得点が違うわけでもなかったため、各回の「小テスト」の点数や全体の経年的傾向を見るには支障はないと判断した。

3 『初年次教育に何が必要か—「漢字テスト」からみた実態とその対策—』(皇學館大学社会福祉論集第10号・2007年3月・pp41～51。以下「拙稿」と記す。